



今年度は附属小の
「創立150周年」です。
ワクワクでいっぱい年にしていきます！

令和6年度 附属小学校だより

スマイル⁴ふぞく



第4号 令和6年7月12日（金） 校長 古野 祐一

1学期前期、お世話になりました！

1学期前期も残すところ2日間。ここまでの子供たちの成長ぶりは、朝の風景にも表れています。

- 生活指導主任の田中教諭が玄関で子供たちを迎えています。満面の笑みで挨拶を交わし、田中教諭とハイタッチする子供たちの姿から、毎日のリズムが整っているなど嬉しくなります。御家庭の教育力の確かさを感じる時でもあります。
- 「先生、明日は玄関前のロータリーの草を刈りましょう」と、声を掛けてくる6年生がいます。「ここは附属小の顔だから綺麗にしないと」と言ってくれます。バス停付近では、雑草を黙々と刈り取っている複数の6年生もいます。北斗の丘や1年生広場、駐車場周り自分たちで目を付けた場所に出向き清掃活動に没頭します。中だるみという姿が全く見えない。「やり抜く力」が極めて高い楽創6年生に感心し、誇らしくもあります。
- 「まだ5分ある！」と言いながら、運動場の朝遊びに駆け込んでいく子供たちがいます。クラスに馴染み、先生や友達との関係に安心感を抱いている様子が伺え、嬉しい気持ちになります。

今、高まっている様々な力が、夏休みの豊かな体験によって益々充実していくことを期待しています。怪我なく事故なく元気な姿で、8月30日（金）に会えることを楽しみにしています。

夏の生活習慣は心を育てる！

夏休みを心待ちにしている子供たちです。ですが、親として心配な面もあるのではないのでしょうか。ゲームやメディア視聴が及ぼす悪影響です。同じリビングで過ごしているのにスマホに心を奪われている姉、ゲームに夢中の弟、そして両親さえも…。会話のない時間だけが過ぎ去り、聞こえているのは誰も見ていないテレビの音。やがて眠くなってきた者から布団に向かう。夜の団欒のコミュニケーション時間は、「おやすみなさい」の1秒間。これは極端な例ですが、せっきくの夏休み、家族のコミュニケーションの時間を更に増やしていく良い機会にしましょう。

そのためには、朝の挨拶を元気に親から発していく。子供の前ではスマホは扱わない。食事中はメディアから離れる。デザートを食べながら会話を楽しむ特別な家族タイムを作ってみる、などなど。子供を変えようとする前に、親としての習慣を見直し変えてみる。不思議と子供の生活習慣も変わっていきます。

学校と家庭のダブルで、大人がより良く変わり、子供と過ごせる今しかない時間を、もっともっと楽しんでいきましょう！



田中教諭と元気よくハイタッチする児童。



バス停付近の雑草を刈り取る6年生。



地雷除去活動など平和に関する話を聞く5年生。



高校生平和大使の講義に聴き入る児童。

※裏面に続きます！

子どものちから

一昨年前から、本校職員が日本全国の先進校に視察に出ています。先週は長野県へ、今週は東京へ、「新たな学びの形とは…」 「これからどのような学校づくりが必要なのか…」多くのヒントと刺激を頂いて戻ってきています。長崎附属をアップデートするためには、この視察が欠かせません。

視察させていただいた学校の中でも「探究」をテーマにした学びを展開している学校が多くあります。子どもが本来もつ欲求である「やってみよう、知りたい、解明したい」から出発する、子どもの可能性や学びに向かう力を重視されています。この傾向は学校だけではないようです。首都圏ではコロナ禍以降「探究」を売りにした興味開発型の習い事が増え、多くの企業が参入しています。

さて、来週から43日間の夏休みが始まります。私が考える「夏休みの探究」を紹介します。北斗サマチャレとともに参考にさせていただきます。

探究の夏

探究は子どもがしたいことからスタート
今、お子様が一番したいこと、一番知りたいことからスタートです。自分がやりたいことをやり抜くことは、幸せなことです。

夏の探究は体験、実物重視で
実際に見に行く、作ってみる。体験や経験はいつまでも子どもの中に残り、新たな探究のきっかけとなります。

何もしない時間も大切
意外とぼーっとする時間が大切です。詰め込みすぎると自分と向き合う時間がなくなります。

とことん子どもに付き合う
統計的に、生涯で親子が同じ時間を共に過ごせるのは、約7年6ヶ月と言われています。小学校を卒業するまでには、その55%を使ってしまいます。特別なことでなくとも、一緒にした経験は、きっと子どもにとって尊いものになるはず。ぜひ親子で探究の夏休みを楽しまれて下さい。

教頭 橋田 晶拓

教えから学びへ²

先駆け

先月、長崎大学の倉田准教授をお招きし、「小学校教師のための生成 AI 活用」という題目で、研修会を開きました。生成 AI の活用により、文章の校正や作成、アンケートの分析、小テストの作成等、様々な場面で業務の軽減や改善が図れるということを実技を通して学んでいきました。

私も早速、本校掲示板に掲載する文章について、生成 AI を用いて作成してみました。作られた文章表現には目を見張るものがあり、本文にも活用することができました。また、本校3年3組の下田教諭は、生成 AI を活用した社会科授業を提案しました。「長崎かまぼこのおいしさの秘密」について学習する単元において、子どもたちは、生成 AI の回答を予想に反映させたり、生成 AI の回答の正誤を検証していったりする学習を展開して



いきました。

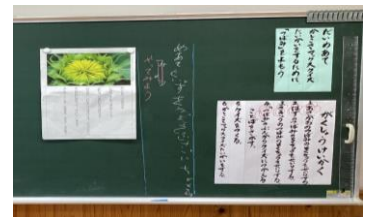
生成 AI により、「0から生み出す」のではなく、「1からよりよいものへと変えていく」という活用法が少しずつ見えてきたところ。そうして生み出された時間や発想は、さらなる教育活動に還元していくことができます。長崎に先駆ける附属小として、さらなる実践を重ねていきます。

主幹教諭 松尾 勇哉

身近な幸せ

A組という存在

この写真は、先月撮影した、ある学級での黒板の様子です。これはどの学級の黒板だと思いますか？



正解は、1年A組です。小学校に入学しておよそ3ヶ月が経ちました。授業の進め方も分からなかった子どもたちが、自分たちで立てた学習計画に沿って学習を進めていること、その時間の「めあて」を自分たちで立てることができていることに感心し、思わずシャッターを切りました。この時のめあては「くいずをつくって、じさいにちよつとくってみよう(クイズを作って、実際にちよつとくってみよう)」と、進行役の子どもが一生懸命に書いていました。

どうして、ここまで学習を進めることができるようになったのでしょうか。それはきっと、同じ教室の後方にいる2年生の存在が大きいのだと思いました。2年A組の子どもたちも同様に、自分たちで学習を進めていました。同じ空間に目指すべきモデルがいて、見様見真似で学びを進める力を高めていく。子ども自らが学びを進めていくA組の姿は、現在の単式学級での学びのモデルともなっています。

A組がある、本校ならではの幸せな瞬間でした。

教務主任 野口 拓也